
僕と六大始祖の学園記録

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と六大始祖の学園記録

【Nコード】

N2478Z

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

少年は過去にとある女性に指導された。そしてまた、彼は何の因果か六大始祖として名を馳せた彼女を召喚する。

これは、そんな少年と女性のハートフル（笑）ストーリー
戦いも勉強もライバルも二人なら大丈夫！

タイトルは『^{オレ}僕と^{アネ}六大始祖の学園記録』になります。

ブログ・召喚（前書き）

現在『オリジンブラッド・イモータル』は別サイトにて掲載するの
でこちらから削除させていただいております。

それにあたって新作『僕と六大始祖の学園記録』を新連載する所存
であります。

今までは一人称で書くことを避けてきましたが、この作品は本当の
意味で書きたいと思っていますので、どうかよろしく願います。

感想、一言、とにかくなんでもお待ちしております。

プロローグ・召喚

「この儀式を成功させて、今まで僕に正当な評価を与えなかった奴らを見返してやるんだ」

とある住宅街に存在する、一軒家に存在する空気の冷え切った地下室で、僕は小さく呟いた。

何故そんなところに居るのかと問われれば、ここが僕の自宅にある実験室……のような所だとかいえない。

「でも、今回だけは間違いなく成功するはずさ。何故なら……爺が隠し持ってた魔道書があるからさ」

そして、僕は魔方陣に自分の出せる分の魔力をありったけ注ぎ込んだ。

……注ぎ込んだ。

……注ぎ込んだ。

「失敗……だつて？ いや そんなはずは……」

いくら古い術式だとしても、あの爺が隠し持っていたほどの魔道書を使ってまで失敗するまで僕は才能がないわけではない。

「たかだか人間霊の使役なんて、使い魔の召喚と同じかそれ以下の技術だろ……どうしてこの僕がそんな作業を失敗するんだよ」

だとしたら、失敗をするはずなんてないのだ。

もう一度、ありったけの注ぎ込めるだけの魔力を注ごうとしたとき、小さな爆発が魔方陣上に発生し、魔力を注ごうとしていた僕は

それに巻き込まれ、壁に思いっきり頭をぶつけた。

「はがぁもっ……………!？」

僕は壁にぶつけた頭を労わるように摩りながら、爆発の起きた魔方阵に目をやる。

「いたたたた……………これでも物理戦闘だけなら評定はAランク超えるんだけどな」

そもそも魔術を習う身だと言うのにもかかわらず何故か、僕こと今神洸の家系は物理戦闘における評価がずば抜けて高い。その代わりに、一番必要な魔術ランクの評価が極端に低いのだ。

それはそれとして、魔法陣上に発生した爆発の煙が晴れると、そこには何かの生き物が立って……………はいない。おそらく何らかの失敗によって召喚が完全に成功しなかったようで、胡坐をかきながら、片手で頭をわしわしと搔いている。あの生き物は

髪が燃えるような朱色をしていて、それなりに短くカットされている。

背は僕より遥かに高くて180センチ前後はあるだろう。

子供っぽい……………とは口が裂けてもいえないような体格をして入るが、どこからどう見ても人間で、間違いなく女性である。

端正な顔立ちで、随分人懐っこさそうな目をしている。

それどころか、既にすたすたとその足を動かして僕に近づいてきている。しかも、その顔には美しい笑顔しか見つけることができない。

これが、爺の魔道書に記されていた人間霊……………でいいのか？
いや、まだ確定はしていない。

僕は何事も失敗だけはしたくない。まずは、挨拶を兼ねた確認からするべきだろう。

「き、君が僕に召喚された人間霊……でいいんだよね？」

僕はにこつと笑って、少し緊張感を隠し切れないままに尋ねた。

「ええ、ワタシをあの忌々しい爺の封印から解き放ってくれたのは貴方であっているわよ。洸ちゃん」

あれ……懐かしい声だ

「え……洸ちゃんって……もしかして」

嫌な予感が背中を駆け巡り、冷や汗が背中を伝って気持ち悪い。

「そ、昔に貴方の教育係として召喚された、ワ・タ・シ」

どうして気が付けなかったのだろうか。

「教育悪魔 天音^{あまね}……姉さん」

訂正しよう……あの爺が隠し持っていた魔道書は、隠し持っていたのではなく封印していたのだと。

「でも……おつかしいわねえ。なんか、洸ちゃんとパスが繋がってるんだけどこれってどういうことなの？」

天音姉さんはそこで再び胡坐を組むと、ほっぺに手を付けて僕に向かって不思議そうに呟く。

「パス……？ も、もしかして 」

急いで僕は自分で書いた魔法陣の確認作業を行う。

すると、気が付きたくないミスを発見してしまった。

「つ、召喚契約と使い魔契約の術式を一字ずつ書き間違えてる……」

「ああ、そっかあ。だったら、これからまた一緒に洗ちゃん」

僕に封印をとかれて召喚された教育悪魔こと天音姉さんは、ドSな笑みを浮かべながら、僕に向かってにつこりと微笑んだ。

「は、は、は、は……はあ」

「あ、どうして溜め息吐くの！？　もしかして洗ちゃんてば、まあお姉ちゃんに何かされるって思ったの？」

僕は元氣なく再びから笑いをしようとした。

「だつて……え」

つもりだったんだけど。

そうしたかったんだけど、そうはならなくて、く、くすぐりたい！

姉さん、ちよ、やめてええええええええええ！

「あひやはっはひやはははははははははははははははは……!？」

天音姉さんは僕の異変に気が付いて少し経ってからくすぐりをやめてくれたけど、時すでに遅いって言うか遅すぎて意味がないよもう。腹筋が……とどこどころの筋肉がアアアアアアアこの嫌から

せ何なのおおおおお！

僕はうずくまって身悶えた。

正直、ちよつとだけ涙が零れ出てきた。な、泣いてなんかないんだからな！

これが、僕と天音姉さんの使い魔契約の成立シーンだった。

くすぐりによって引き攣ってしまった腹筋に加えて、召喚の際に持っていた魔力量もあってか、僕の身体はいろんな意味でボロボロだった。

おそらくそのせいもあってか、姉さんは昔と比べてもそれなりにソフトな接し方になっていた。

「ええつと。そういえば姉さんってどうして爺に封印されたんだっけ……」

だから、昔の教師と教え子（笑）の状況よりはいくらかマシな関係に……そもそも使い魔契約をしたにも関わらず姉さんは自由気まますぎる。

「えー、洸ちゃん忘れちゃったの？ お姉ちゃんあんなに洸ちゃんのこと愛してたのに」

「は？ え？ な、な、何のことだよ！？」

もう何のことだか覚えてないし……なんか思い出してみても碌な思い出がない。

「もう、だーから。子供の洗ちゃんのをナニして」
「あああああああ！　思い出したから、思い出したから言わないでくれえええええ！」

そうだった。姉さんは教育悪魔になる前の素材はサキュバス
淫魔の類だったつけ。

それで爺がうらやましいだの何だの言って……結局爺は自分の思い通りにならないから封印したんだっけ？

「と言うか、爺も爺で封印の理由は碌なもんじゃなかったような」「そうだねー。ま、契約した以上は洩ちやんの願いを聞かないといけないのよねえー。それで、どうしてまたこんな真似したの？」

姉さん……言っていることは確かに正しいと思うけどさ、何で脱ぐんですか？

「どうしてって、僕は僕に正当な評価を与えなかった奴らを見返してやりたくって……っていかどうしてどんどん脱いでいくんだよ！？」

「だって、こんな密室で男性と女性がやることなんてさ
「そんなわけあるかあああ！ いいから服を着ろ！ ていうかど
うしてそんなに勝手気ままなんだよ！？」」

マスター
そもそも、なんで契約して主になったのにこんなにも立場が対等……
と言っより下なんだ？

「ああ、それはね　洸ちゃんの魔力程度じゃ使役なんて到底できないうってこと。せいぜい召喚が関の山って所ねえ」

「もっとオブラートに包むように遠まわしに答えろ！ それ以前にどうして考えていること分かるんだよ！？」

僕の喚く様な声に、姉さんは馬鹿にするようにニヤケながら答える。

「だから、先刻さつきも言っただけどパスが通ってるでしょ。洸ちゃんも意識を集中してワタシのことを考えれば少しくらいならワタシの考えていることも分かると思うわよ」

忘れていた……さっきまで散々自分で考えていた重要なことを。そうなのだ。僕こと今神洸と教育悪魔天音は何の因果が契約してしまったのだ。

「えっと、それと洸ちゃん。その『僕』って言う一人称気持ち悪いわよ」

そして何度も言うが、姉さんは僕の専属の教育悪魔だった。

「べ、別に良いだろ……あの頃とは違うんだからさ」

だから、例えば言葉にして拒否しようとも……身体が言う事を聞いてくれない。

「えー、せめてお姉ちゃんの前だけでも昔みたいに『俺』って一人称にしてくれると嬉しいんだけどなあ」

「あ、ね、姉さん……また誘惑チャームの魔眼使いやがったな!？」

「ふふ、教え子は教育者の言う事を聞くものよ」

勝利したような満面の笑顔を浮かべながら、姉さんは僕に絡みつくように抱きつく。

どうやら、そのときの僕は俗に言う『キレて』しまった状態にな

ったのだろう

「くそ、馬鹿にしゃがって！ 契約者に命ずる、僕を、俺をからかうなああああ！」

だから成功したのかもしれない。

「えっ、嘘……契約の強制執行ギアスが」

初めて行使する、マスターとしての従者に対する絶対の威力を持つ強制執行ギアスが。

「ど、どうだ！ これで姉さんも俺に逆らえないだろ！ へへっ、俺にだってできるんだ」

だが、どうやら僕は強制執行の成功に浮かれていたようだ。だから本当の意味での敗北に気付くことができなかった。

「でも、洸ちゃん？」

「な、なんだよ」

「ふふ、一人称が『僕』から『俺』になったわよ」

「え、どうして……確かに俺の強制執行は成功デスベル　　ね、姉さん……まさか、誘惑の魔眼を解除しなかったのか！？」

そこで姉さんは今まで笑いを堪えていたかのようににんまり笑うと、こう言った。

「確かに強制執行は発動して、からかうことはできなくなったけどお、誘惑の魔眼の効果の使用禁止までは言われなかったからねー。ちなみに残念だけど、洸ちゃんはワタシの前で『俺』っていうこと

しかできないからね」

「な、んな……」

「それと、強制執行の同時許容は最大三個までだからよく考えて使うこと。分かったかな洸ちゃん？」

どうやらば……俺は、永遠に姉さんには勝てそうにありません。

でも、同時にこれで良かったのかもしれないと思う。なんせまだまだ未熟な俺を姉さんにまた、世話を焼いてくれるといっているのだから。

「なーんか照れちゃうな……じゃあ改めてよろしくね、マスター」

顔を少しだけ赤らめて、姉さんは俺に手を出す。

俺はその手をがっしりと掴み、少し上にある顔を見上げて言う。

言おうとした……

「よろし」

「ああ、言い忘れていたけど召喚されたのはワタシを含めて二人と一匹だから」

そんな突然のカミングアウトに俺は耳をついつい疑ってしまった。

ワタシを含めて二人と一匹？　じゃあ、残りの一人と一匹

つてのはどこに……

「あら、本当に気付いてなかったのね。まあ、ワタシの従者として召喚されたわけだから気付かなくても仕方ないか」

俺の考えていることに対して簡単に答えを述べてから、姉さんは指を弾く。

その音に反応するように、今まで何も存在していなかった空間に

一人と一匹の虚像が現れる。それは次第に実体化してくると、俺よりも少し年下くらいの少年とトカゲに羽の生えたような形をした生物が出現した。

「少年って……洸ちゃんも失礼ね。この娘はバステトのテト、こっちのこの子が龍王の子供のキュリオス」

「バステトって…日本で言う猫又のことだよな？ それに龍王って

」

「テトはエジプトの女神の末裔ってだけだから女神でも妖怪でもない純粋な人間よ。それに、龍王って言っても旧世界の龍王だから成長しても大して強くはならないから安心して」

そう言って姉さんは微笑むと、近くにいたキュリオスを俺の頭の上に乗せる。

「あの、姉さん……一体なにをして……？」

そう疑問を口にしたとき、先ほどまで一言も話さずに黙っていたバステトのテトが口を開いた。

「どーしてテトがアンタみたいな人間に使役されないといけないんですか！？ そもそも胸があんまりないってだけで少年ってどういうことですか！ テトは女の子ですよ」

「はいはい。いい子だから静かにしてなさいテト」

「天音様、テトは納得いきません。だってあの爺の息子ですよ！
？ 絶対に信用できませんですよ」

酷い言われように心が折れそうです。

もっとも、流石に年下の子供に馬鹿にされたところで俺の自尊心は……自尊心は絶対に揺るがない……と思う。

「まあ、ワタシの任意で召喚と返還はできるから安心していいわよ」
「出来る事ならその娘とはあんまり関わりたくないです姉さん」
「そうねえ、洸ちゃんに毎日魔力切れを起こされるのも嫌だし……
極力召喚しないことにするわね。テト、キュリ、戻りなさい」

姉さんが再び指を弾くと、逆再生されるようにテトとキュリオスの姿が消えていく。

「テトは絶ええええ対にアンタのことなんてマスターなんて思わないですからね！ キュリちゃんもそうですよね？」
「キュ？」

テトの言葉にキュリオスは首を少し傾げたと思うと、二人の姿は完全に消えてしまった。

「さあて、洸ちゃん。あの爺はまだこの屋敷にいるの？」

姉さんはそれを確認した後、数秒の間もなく尋ねてくる。

俺はその問いに対して首を縦に振ると、途端に歓喜に満ち溢れたような声で宣言した。

「ブツ血KILLわよ」

「ね、姉さん！？」

その後、俺は姉さんに引き摺られながら陰気な地下室から連れ出され、姉さんを封印していた張本人である爺の部屋まで連行されたのは言うまでもないだろう。

俺は思った。姉さんは人をいたぶっているときに一番輝く悪魔^{ひと}なのだ。

「な、洸！ 何故コイツがコッチの世界に召喚されている　　ぎ
やひいいいい」

「おらあ！　よくもワタシを封印なんてしてくれたな爺イ！」

「おほお、そ、そこは　　」

我ながら凄い従者を召喚したものだと思う。

最強にして最凶……間違いない切り札ジョーカーとしては申し分ない従者だ
とっておこう。

（けど……明日から学園に通うのが激しく鬱鬱に感じるような感じな
いような……微妙な気分だ　　）

プロローグ・登校

と言うわけで、翌日、当然のごとく通学中の俺の隣には姉さんが並んで歩いていった。

別に不満があるわけではない。姉さんは従者として最高ランクの従者に当たる‘始祖の悪魔’に格付けのされるほど実力者である。それに比べて俺ときたら、魔術を学ぶ身でありながら体術ばかり上達しているという現状である。おおよそ人間の到達することのできる最高のランクまで体術だけは昇華させた。だけど、それじゃダメなんだ。

別に武道の達人になりたい訳ではなかった。本当は魔道を極めたかった。

しかし、俺は魔道師に至ることはできずに魔術師止まり。他の人間より優れている事と言ったら体術だけと来た。

魔術師は決して魔道師に勝つことはない。この世の中に広がる常識のような言葉。

だからこそ俺は、一人の魔術師としてその常識を覆したい。

「だからこそ、俺は正当な評価を与えなかった奴らを見返してやるんだ……」

「確かにその決意は立派だと思うけど、社会の窓が全開よ……洸ちゃん」

けど、それよりも先にこの恥ずかしい出来事を現実から消し去りたい。

「べ、べべ、別に知ってたからな！」

俺は急いで全開になっているズボンのチャックを閉める。

「はいはい、分かってるわよ……。それにしても長い坂道ねえ」

姉さんはそんな俺の言葉を華麗にスルーしながら、通学路である、通称‘魔道師殺しの坂’を見据える。

「なんたつて、通称が‘魔術師殺しの坂’だからね」

何故この通称で呼ばれているのかといえ、答えは単純なことがある。魔道師には出来て、魔術師には出来ないことがあるからだ。それは飛行魔術である。

魔道師の第一歩として試されることが、この通学路にある坂道を飛行魔術で楽々通学することである。

入学式の時には既に優劣がはっきり分かるという鬼畜な通学路であるとすることはつい最近知ったことだった。

「そついえば洸ちゃんって飛行魔術が苦手だったねー……」

「俺は姉さんみたいに何でも出来る人とは違うんだよ」

昔のことを思い出しながらかつた風に呟く姉さんに対して、俺は八つ当たり気味に言葉を返す。

「あら、ワタシだって、始祖の悪魔’に数えられる前は洸ちゃん位にしか魔術は使えなかったし、もしかしたら洸ちゃんよりも弱かったのよ」

それに対して姉さんは空に流れる雲のように、自由気ままな感じで答えた。

正直、俺には一生かかっても出来ない生き方だと思う。それに、稀に羨ましいとも思っていた。

「嫌味にしか聞こえないよ……姉さんがそれを言うのはさ」

だから俺は少し拗ねた様に言葉を返すことしか出来なかった。

「ま、洸ちゃんはワタシを召喚して従者にしたんだから自身を持ちなさいな。そうじゃないと従者として一生、洸ちゃんのことを主だと思う日が来なくなっちゃうから」

そんなこんなで俺と姉さんは約三十分後に校舎に到着した。ちなみに本当に余談ではあるが、この学園には学年に五つのクラスが存在する。

A組、魔法使いに属する生徒が集まるクラスである。

B・D組、主に魔道師に属する生徒が集まったクラスである。

E組、魔道師にすら至ることのできなかった生徒の集まったクラスである。

つまり、何が言いたいのかというと……、俺はE組の住人であるということだ。

そんなクラスが一番後ろにある窓際の席が俺の席である。

「お、今日はお前が二番か洸……。って、お前の隣にいる綺麗なお姉さんは誰だよ？」

そして、たった今声をかけてきた陽気な男は笹宮凧ささみやなぎである。

クラス内での呼び名はナギだ。

「よ、おはようナギ。この人は昔、俺の専属の教育悪魔だった天音姉さん。で、今は何の因果か俺の従者になった」

「は？ 天音って、あの『六大始祖』の一角の天音か？」

ナギの冗談だろというような驚きの口調に、俺が答えるよりも先に姉さんは口を開いていた。

正直な話、これが俺と姉さんの学園記録の始まりだったのかもしれない。

「ふふ、よく知っているわね。お姉さん嬉しいなあ」

姉さんの言葉に、ナギはわなわなと身体を震わせながら小さく呟く。

「…これで……」

その声は聞こえるか聞こえないか微妙な大きさの声だったが、次第に大声に変わっていた。

「魔術師が魔道師劣るっていう理屈は覆せるぜ！」

その声は教室だけではなく、学園中に聞こえるほどに大きな声だった……のだと思う。

だから集まってくるのだ。格下のものを馬鹿にする嫌味な連中が。

「へえ、落ち零れのE組の生徒が何を騒いでいるかと思えば……」
「魔術師が魔道師に勝つ？ とんだ笑い話に過ぎないよ」

そんなことを好き勝手に言いながらE組までわざわざ来た人物は、魔道師学級の中でも上位魔道師に位置するB組の中でも有名なウザさを誇る鳴神兄弟だった。

もちろん、そんな安い挑発にナギが食って掛からないわけではない訳で……

「はん、お前らみたいな魔道師なんて血統に物を言わせた親の権威を振りかざしてる哀れな人間じゃねーか」

その言葉を待っていたといわんばかりに鳴神兄弟の目がいつもの如くきらりと光るのだ。

「じゃあ、校則に則って決闘でけりをつけようじゃないか。魔術師」
「やってやるよ、俺の代わりにこいつがよ！」

その瞬間、俺の背中にナギの掌が打ち付けられた。

……………打ち付けられた？

「……………は？ 何で俺が決闘なんてしないといけないんだよ！？」

しばしの思考停止の後、俺はナギに怒鳴るように言い返す。

「えー、お姉さんも洗ちゃん成長振りを少し見たいなあ」

「何を人事みたいに言ってるんだよ姉さん！？」

だが、それに対して言葉を返したのは姉さんで、あまつさえとてもない事を言ってくれた。

「だって、その二人って私から見れば洗ちゃんより実力は下よ？」
「なっ、何言って」

そんなこと言ったら本気で俺が魔道師二人と戦うことに……

「へえ、君の従者は随分と面白いことを言うね……。決めたよ、君には僕たち二人から正式に決闘を申し込むよ。それで思い知ると良
いさ、自分の従者がどれだけ無知なことを言ってしまったのだとね」

二人の声が重なって聞こえた。

「なつ、待ってくれよ。気を悪くしたなら謝るからさ、な？」

「いいや、常々思っていたんだ。この学園に魔術師なんて存在を教育させるような金を使わせるのは勿体無いってさ」

俺の言葉は結局、鳴神兄弟に聞き入れては貰えなかった。

時既に遅し。いや、この場合は覆水盆に返らずの意味のほうがど
ちらかと言えば合っている気がする。

そもそも、とぼっちりもいいところだ。本人の意思に関係なく、
勝手に決闘を申し込まれるなんて……。

「そんなに落ち込むことないでしょ、洸ちゃん」

そんな極度に落ち込んだ俺の背中を、姉さんはバシッと一回強く
叩く。

「だけど、返す言葉が何一つ思い浮かんでこなかった。」

「ま、洸。俺はお前が勝つつて信じてるからよ」

いい笑顔で親指を立てているナギの指を見て、俺は力なく呟く。

「なんだ、その指をへし折ればいいのか？」

そもそも、絶対に姉さんは決闘の意味を分かっていない。

この学園における決闘では、勝者は敗者への強制執行権利を契約書¹によって奪い取ることが出来る。
ギアスベ

酷い場合は即刻自害を要求されたりと様々合ったらしいが、今は契約書規定によって最低限の人権と生命活動を守られているが、それでも従者に対する強制執行とは異なつて、対象者に対する拒否権は与えられない。

つまり、契約書が存在する限り脅えながら生活をしなければなら
ないということになるのだ。

それをよりもよつて、あの鳴神兄弟二人に決闘を申し込まれる
なんて……

「たぶん、あの学園長は笑いながら許可を出すんだろうな……激しく鬱²だ」

再び小さく呟くと、姉さんが俺の肩に手をポンと乗せるように何
回か叩いた。

「大丈夫、いざとなつたらお姉さんが助けてあげるから」

「つまり、それまでは自力で死ぬ気で戦えと？」

否定して欲しかった。

けど、姉さんはサディスティックな笑みを浮かべて頷いた。

「そ、いざとなつたらね」

「強制執行を使って無理矢理戦つてもら」

そこまで言いかけたところで姉さんは妖艶な笑みで答えた。

「洸ちゃんの魔力じゃそこまでは無理よお。ふふ、とりあえず頑張ってみれば良いじゃないの」

俺は返す言葉を完全に失い、茫然自失のまま姉さんの言葉に頷くことしかできなかった。

「ま、俺も応援には行くから安心しろって」

その時の俺はまだ、本当の意味で姉さんの主にはなれてなんかいなかったんだ。

今だからこそ言える。

姉さんは俺のことをいつでも一番大事に思ってくれていたんだって。

プロローグ・完結

「それではこれよりB組、鳴神雨竜、鳴神晴竜の二人とE組、今神洸及び従者の天音の決闘を宣言する！」

学園長の宣言に、噂を小耳に挟んだ生徒の群れが喚声を上げる。

噂……と言っよりも厳密に言っのならば、ナギが全学年を大声を上げて歩き回った結果がこれだ。

そもそも観客がこんなにもいる状態で負けるなど、ただの辱めである。魔術師が魔道師に……それも、従者と主だけで挑むということと自体が前代未聞の事態だ。

今までに何度が存在した魔道師と魔術師の戦いはいずれも一対多数の決闘であつたが、そのいずれも魔術師は魔道師に惨敗してきた。もちろん今まであつた決闘に参加などしていないが、それでも決闘なんてする前から結果なんて分かりきっている。

「どう足掻いても俺一人じゃ数秒も持たないって……」

俺がぼそりと呟くと、姉さんは笑みを浮かべながら言葉を返してきた。

「それはやってみないとわからないわよ……。それに、お姉さんの言葉が信じられないって言っの？」

「俺の実力が鳴神兄弟よりも上だって事か？　姉さんの言葉でもそれは信じられない……」

俺が使える最大の魔術は、‘模倣’と、‘時間操作’の中位魔術に限

界だ。

模倣と言っても、出来ることといえば戦闘経験を模倣と言う。仮想エミュレーターを使用した体術の戦闘経験の憑依が良いところし、俺の使う魔術は現代魔術の我流アレンジと言うのが一番しっくり来るだろう。だから魔術名が機械などから取られているものが多いのだ。

「でも、まあ……いざとなったら姉さんが助けてくれるんだろ？
だったら精一杯やってみるさ」

けど、俺の後ろにいるのは、始祖の悪魔、の一角であり、師匠である姉さんがいるんだ。

「仮想エミュレーターによる戦闘経験の憑依及び加速装置ライナックによる戦ア闘補助を開始
シスト」

「さ、冴ちゃんのお手並み拝見つと」

俺の後ろで姉さんは胡坐を組んで座り込むと、観客に紛れていたナギを引っ張り出して隣に座らせていた。

「えっと、ナギ君だっけ？ 冴ちゃんが負けたら死なば諸共と言うことだから覚悟しておいてね」

その言葉にナギは顔を真っ青にしてこくりと頷いていた。

ほんの少しだけ同情してしまっただが、そもその原因はナギのせいなのだからと思い直し、俺は鳴神兄弟に準備は出来たといわんばかりに睨み付ける。

「へえ、従者は決闘に参加させないのか……」
「もしかして君って、魔術師云々の前に頭の中空っぽだったりするのかな？」

鳴神兄は感心したように、弟は馬鹿にするような口調で思い思いに言葉を放っている。

だが、その一瞬は俺にとって絶好の好機である。チャンス

「頭の中が空っぽで悪かったな！」

加速装置の利点は三つある。

一つ、前動作抜きで動くことができる。

これはつまり、居合いのように一瞬で目標に接近することが出来るということだ。

二つ、音速の壁を蹴ることが出来るようになる。

これは加速装置によって擬似的に音速の壁を作り出し、飛行魔術を使用しなくても空中闊歩をできるようになるという利点が存在する。

三つ、全ての過重負担を加速装置が稼動している限りゼロにすることが出来る。

これによって人間に不可能な動きを実現することが出来るようになる。

「ふん、これだから魔術師の使用する魔術は品が無いというんだよ」

鳴神兄は悪態を突くかの様に小さく呟くと、その掌の上に加工済みのルビーのような輝きを放つ物体を発生させる。

「炎の四法！？ 違う……召喚か？」

それはマグマの圧縮体のようだ。
鳴神兄の掌で生成された‘ソレ’は掌から零れ落ちると、蜥蜴とかげのような生物になっていく。

ササメメントリ
「火炎精霊」

涙目になりそうな感情を押さえつけて、後ろで傍観者を気取っている姉さんに俺は叫ぶ。

「精霊召喚って　　姉さん、この二人が本当に俺より実力が下なのかよ!？」

「精霊召喚なんてワタシに比べればどうってことないでしょー」

だが、姉さんから返ってきた言葉は返ってきて欲しかったような言葉とは全く違った。

そもそも、鳴神兄だけでも無理ゲーなのにもれなく弟もいるんだぞ？

「やっぱり無理ッ!」

「ハハハッ!　これが魔術師と魔道師の力の違いというやつさ。晴竜、お前も見せてやるといい、力の違いをさ!」

加速装置の出力を最大限まで発揮させ、襲い来る火炎精霊の猛攻を紙一重で回避するのが精一杯の状況で、これ以上何をどう頑張ればいいのか？

それでも姉さんは、俺のことを後ろのほうで見守っているだけだ。

「そんなに逃げ回っていたら身体も火照ってきただろ？　僕の厚意も受け取っておきなよ」

それに加え、鳴神弟は鳴神兄とは正反対の属性の精霊召喚を詠唱している。

正反対の精霊召喚……………これは好機か？

「ライナック オーバーアクセル
加速装置最大出力！」

俺は加速装置の出力を文字通り最大出力まで上げる。

『攻撃をするのか？』と問われれば、そうではない。狙いはまったく別なところにある。

「そつだ、お前ら魔術師はそつやって無様に逃げ惑えばいいのさ！」
「勝手に言ってる……………」

校庭の地面が高熱によって焦がされ、異臭が鼻を突く。しかし、今はそんなことを気にしている場合ではない。

なぜなら、俺の眼前では口元から冷気を放っている狼のような精霊を召喚した鳴神弟が立ち塞がっているからだ。

「フェンリル
氷精霊」

だが、俺はあえて口元を不敵に歪ませて見せる。そして、呟くのだ。

「天才つてのは手に余っちまうものだよね？」
『行け！』

その言葉に反応するように、鳴神兄弟の召喚した二体の精霊は前後からほぼ同時に突進してくる。

この状況こそ、圧倒的に能力で劣っている魔術師の俺が魔道師に

勝つために考えた策。それも、成功確立は五割を下回るような下策だ。

「姉さん、これが俺にできる限界だ！」

その場で左脚だけに力を込め、加速装置の補助を施している右足で音速の壁を蹴り上げる。

音速の壁は蹴られる事によって破壊され、衝撃加重に比例した爆発的推進力を作作者にもたらししてくれる。本来なら人間には決して耐えることのできない衝撃すら、加速装置が吸収してくれるため、この下策は初めて上策に成り代わってくれるという寸法だ。

「なっ、僕たちの力を利用しただって!？」

火炎精霊と氷精霊は俺の目論見通りに、突進していたスピードを殺しきれずに激突しあう。兄と弟の召喚した精霊に大きなランクの違いがあつたのか、兄の召喚した火炎精霊は大きなダメージを負つたようだ。

「へえー、洸ちゃんも意外な方法で立ち回るのねえ。でも、それだけじゃ精霊を強制返還はできないわよ」

だが、後ろで姉さんが呟いたように強制返還をするまでは到らなかったようだ。

「チッ……これじゃ打つ手が無い　　って、姉さん？」

いつの間にか、俺は本気で勝つために戦っていたようだ。姉さんに再開するまでの俺なら、間違いなくあきらめていた決闘を。

「さあて、洗ちゃんがお姉さんの教えを思い出してくれたようだからお姉さんもそろそろ期待に添ってあげようとするかしら」

いつの間にか隣に立っていた姉さんは俺の頭を優しく撫でた後、何かを呟く。

その呟きが詠唱だったのか、姉さんを召喚した際に付属品のように召喚してしまった毒舌少女（俺命名）テトが不満げに文句を言いながら召喚された。

「どうしてテトが天音様の為ではなくこんな人間なんかのために……でも、天音様の命令だからテトは頑張ります！」

テトはとてと前に歩き出ると、どこからとも無く取り出した猫の手のような大きなハンマーを肩に担ぐように手に持つ。

「なっ、姉さん？ あの娘が俺より強い」

俺がそこから続きを口に出そうとしたとき、出そうとしていた言葉をいつの間にか飲み込んでいた。

だってそうだろう？

何故なら、さっきまで苦勞して回避をしながら攻撃をしていた火炎精霊と氷精霊を猫の手のような大きなハンマーを一振りしただけで強制返還させてしまったのだから。

「テトに勝つつもりなら古龍種でも召喚しやがれてっんです」
エンシェント・ドラゴン

しかも、本当に服についたゴミを手で払うかのように一瞬でだ。

「な、従者が召喚師……それも主より優れているだって!？」
サモナー

「魔術師の召喚した従者に僕たちの精霊が一瞬で……ば、バカな!」

そんな言葉を好き放題に言っている鳴神兄弟の言葉はテトの触れてはいけない何かに触れてしまったのか、テトの額に青筋が一本浮かぶ。

「天音様……こいつ等ムカつきます！ 人間、どうやらお前に負けるのが一番屈辱な様ですのでお前が止めをさすです」

俺はそんなテトの迫力に負けてしまい、無言で加速装置で鳴神兄弟に近づいて反撃の間すら与えずにリバーブローを叩き込む。

『ウツ……』

「なんか……悪い」

同情せずにはいらなかった。

「この決闘、勝者はE組の今神洸！ 強制執行の権利書の譲渡は後日学園長室によって執り行う！」

その日、魔術師が従者を従えて魔道師に勝利するという偉業が達成されたという事実だけがネット放送によって全国に報道された。

俺はこの日に思った。

いつか必ず、姉さんの隣で一緒に胸を張って歩けるような存在になりたいと。

第壱記録

第一章

魔術師も魔道師に勝つことができるという事実がネット放送を介して全世界に広がると、世界中に存在している魔法学校は群雄割拠の時代を迎えた。

今まで辛酸を舐め続けてきた魔術師連中は今までに増して、己の行使できる魔術を磨くことに専念するようになった。ある意味でいい傾向にはあるが、思いつきだけで魔術師が魔道師に勝つことはやはりあり得ないようだ。

だが、それは同時に、今までのように魔道師たちが才能に物を言わせて努力を怠り続ければ、いずれは魔術師が魔道師の上に立つ時代も来るかもしれない。

しかし、この考えはあくまで仮定である。

「それにしても……だ。ナギ……お前は他の連中みたいに努力して強くなるうとは思わないのか？」

「んあ、別に魔術師と魔道師の戦争が勃発するわけでもないだろう？ だったら、俺は今までどーりに自分に見合った努力を続けるよ」

何故なら、こうして今までと立ち位置を変えない人間も多数存在するからだ。

書く言う俺も、あれから姉さんの特別授業を除いては今までと特に変わずに学園生活を送っている。

「でも、洸ちゃんは学校が終わったらお姉さんの特別授業があるからね」

「わかってるよ……。えつと、今日は三大魔法と契約についてのシステムの復習……だっけ？」

今さら……そう思うような特別授業の内容ではあるが姉さん曰く、
『基礎知識の向上は洗ちゃんみたいな近代魔術を利用する人間にとつてもっとも大事なことなんだぞ』

だそうだ。

実際のところ、基礎知識などの基本的な部分は正直な話だが、この学園に存在するどの生徒よりも成績は秀でている方であると自負している。

姉さんの言葉のように、近代魔術は古代魔術とは違って基礎さえ抑えていれば安定した出力を出すことができる。つまり、基礎こそが近代魔術にとっての根幹であると言えるのだ。

「そ、基礎知識はバツチりなようだけど確認も兼ねてね。それと、契約システムについては洗ちゃんはまだまだ知らないことが多いみたいだし」

「姉御も随分と洗に手を焼くんですね」

今の今まで机の上で「ぐでーん」と伸びていたナギは空気が入ったように綺麗に背筋を伸ばして起き上がると、目を輝かせながらニヤケ顔で姉さんに向かって言葉を放つ。

「まあ、大切な教え子であり主だしね。お姉さんは先生としても洗ちゃんの世話を焼いてあげたいのだ」

姉さんはそんなことを言って、わっしわっしと俺の頭を撫で回す。

「や、やめろって、もうそんな歳じゃないだろ？」

「うっん。お姉さんは洗ちゃんのお姉ちゃんて先生なのだから問題は無いのだ」

俺の言った言葉は無意味どころか逆効果で、さらに頭を撫で繰り回される。けど、不思議と嫌な気はしなかった。

もっとも、どこからか感じる射殺するような殺気さえ感じなければの話だが。

そこで、ようやく授業開始五分前を知らせる予鈴がスピーカー越しに校内に鳴り響く。

「お、そろそろ授業の時間だな……今日一日がんばりますか」

そう言ってナギは自分の席に戻っていく。その隣には、ナギの従者であるツインテールの小学生ほどの女の子がちょこんと申し訳なさそうに座っている。

もちろん、俺の隣には姉さんが座っている。

「俺もがんばるかな……」

こうして、俺の長い一日が再び始まったのだ。

何度も言うようで悪いが、俺こと今神洸は魔術師である。

魔術師だから、魔道師や魔法使いを目指して今日も勉強していた。それだということにも拘らず、俺は魔術師としての偉業をつい先日有成し遂げてしまった。それも、自分の力ではなく従者である姉さんの従者の力によって。

しかし、いつの時代でも事実というものは捻じ曲げられて民衆に放送されるものだ。

「今神…… お前が鳴神兄弟に勝利してからというものの、何故だか知りたくも無いが近代魔術の授業は人数以上に視線を感じるんだ」

E組の担当魔術のすべてを受け持つ教師である、はすみれんじ蓮見煉慈先生は俺に向かってめんどくさそうな口調で話しかけてくる。

「知ったこっちゃありませんよ……。それに、あの決闘だって事実だけが広まって内容は公表されていないみたいですし」

それに対して同じように俺がめんどくさそうに言葉を返すと、煉慈先生は厭味をいつかの如く、姉さんをちらちらと見てから黒板に無言で文字を書き込んでいく。

黒板に大きく書かれた文字は『実習』の二文字。

「というわけで、今日は近代魔術による召喚術についての実習を行う。一旦、自分の従者及び使い魔を返還してくれ！」

煉慈先生の言葉に、ナギを含めた俺以外の生徒たちは次々と従者及び使い魔を返還していく。

「それじゃ、ワタシも返還するかな」

そして、姉さんは勝手に転移術式を発生させて召喚される前の場所に戻っていく。

煉慈先生は姉さんが完全に返還されたことを確認した後、改めて教室内に従者及び使い魔の類が残っていないことを確認すると、再び黒板にでかでかとチョークで文字を書き込んでいく。

そこには先ほどとあまり変わらない大きさの『付与効果』四文字が書かれていた。

「それじゃ、お前らに一つ問う。付与効果とは一体どのようなことを示している。ナギ、答えてみる」

煉慈先生に指名されたナギは、席から立ち上がるといつもの様な口調で答えた。

「従者及び使い魔を召喚する術式に強化の術式や対属性の術式を組み込むこと……であつてますかー？」

「まあ、そんな感じだ。座って結構だ」

煉慈先生の言葉にナギは小さく頷くと、自分の席に座りなおす。

「そしてお前らに与える課題は……、同調シンクロの術式を組み込んだの契約済み従者及び使い魔の召喚だ。何か質問はあるか？」

そんな煉慈先生の問いかけに、少し小柄な銀髪の少年　クラスメイトの一人であるシグ・フレイマーは立ち上がって疑問を口にする。

「同調の術式を組み込むことによって出来る事は契約の際に繋がるパスがあれば大体のことは出来るはずんだけど……その説明を

頼めるかな、煉慈さん」

「いい質問だ、シグ。この同調の術式を組み込むことによって主から従者、使い魔への一方通行な魔力の流れを循環させることができるようになるんだ。つまり……パスとは違って、より一層従者との繋がりが強くなるし、主の魔力切れを防ぐことが出来るようになる。説明はこんな感じだが……シグ以外に何か聞きたい者はいるか？」

煉慈先生の二度目の問いに声を上げるものはいなかった。

「そんじゃ早速、各々で召喚術式を書いてくれ。そこに同調の術式を加えて魔力を注げばいい。術式を組み込むときは契約刻印を上書きするんじゃなくてパス回路に上書きをすることが重要だ」

煉慈先生の支持伊通りに、E組の魔術師は次々に自分の従者や使い魔を再召喚していく。先ほど質問していたシグは完璧に同調の術式が馴染んでいたのか、従者である 白面金毛九尾の狐^{びていこ}の子孫、九代目玉藻の尻尾が主であるシグの尾^{びていこ}？骨のあたりから、ゆらゆらと蜃気楼のようぼんやりとだが生えているように見える。

そしてナギだが、どうやら術式を組み込むことに失敗したらしく、従者のツインテールの少女の身体が成長した反面、召喚者であるナギの身体が十代前半まで若返ってしまっている。

しかし、当の本人であるナギは従者の成長した身体に抱きつくなどしているところを見る限り、一概に失敗したとも言えないようだ。そして俺に至っては…………

「姉さん……何で猫耳なんだ？」

「そういう洗ちゃんだって犬耳が生えてて可愛いわよ」

どこかで失敗してしまったのだろう。何故かお互いに獣耳が生えてしまうという始末。

しかし、パスを繋いでいたときと比べても魔力の供給の通りが良くなっている気がする。そして、姉さんの‘魔’に関する情報が頭の中に微量だが供給されるようになった。

「それにしても……なんで猫耳と犬耳なんだ？」

「それはね……おそろくだけど、お互いの最も見たい相手の姿の具現だと思うの。だって、さっき冴ちゃんが猫耳つけていたら可愛いなあって考えていたところ召喚されたら猫耳の冴ちゃんがいたし。

それと冴ちゃんが犬耳萌えだったなんてお姉さん知らなかったなあ。今度からこの格好で一緒にいてあげるわね」

ウインクと同時に胸を押し付けるように姉さんに抱きつかれた。

「うおっ、やめろよ姉さん！」

「何も嫌がること無いじゃないの〜」

「嫌がるとかそういう前に他の奴らの視線が
ああもう！ お
前らも温かい目で見守ってるんじゃないよ！」

そんなこんなで、午前の授業を終えた俺たち一行は学食に向かう。ちなみに一行というのは、俺、姉さん、ナギと従者の少女、そして何故かシグと従者の九代目玉藻のことだ。

もともと俺はナギと仲が良かった為に特に問題は無いが、シグは違う。

彼はいつだって一人で常に在るというスタンスでクラスメイトの一員として存在していた。それがつい最近になってからというもの、今の従者である九代目玉藻をこの学園に連れて来るようになった。

そして、先日の決闘の後と言うものは興味を持ったのか俺と一緒に昼休みを過ごすことが多くなった。

それが今の状況である。

「なあ洸、ここらでそれぞれの自己紹介を改めてしておかないか？」

ナギはテーブル席の一角に座ると、思いついたように話しかけてくる。

「姉さんの正式な紹介もしてない……つか、ナギの従者については一度も話して貰った記憶も無いしな」

「ワタシもさんせい。だって、ナギ君の従者の女の子が可愛いから」

「わ、私ですか！？ 六大始祖の天音様にそんなことを言ってもらえるなんて……ナギ様、私はどうすれば！？」

姉さんの言葉にナギの従者の少女が顔を真っ赤に染め上げて、ナギの服の裾をバタバタと引っ張りながら暴走している。

「いやー、俺は百合もいけるからおk。どんどんやってくれよな、エリーナ」

そんなことを言っただけで親指をぐつと立てているナギの姿を見て、正直なところへし折りたくなってやった。

「百合……？ ナギ様、百合とは何でしょうか」

そんなナギに対してエリーナと呼ばれた少女は、純粹無垢な眼差しでナギの事を見つめている。

姉さんも混ざって話があらぬ方向に曲がってしまう前に、俺はシ

グに話しかけた。

「なあ、どうしてお前はスタンスを変えた。やっぱりさ、あの決闘があつたからか？」

「スタンスを変えたつもりは無いよ。けどね、君たちを見ていたらあの人のことを思い出しちゃってね……。そしたらなし崩しに寂しさが襲ってきた。だから玉藻を召喚したんだ」

俺の言葉に対して、シグは何の迷いも見せずに決まっていたかのように答えを述べた。

どうしてだろうか……。シグの言っていることを疑うことが出来なかった。

「じゃあ、どうして俺たちに近づいてきたんだ？」

「さあね、僕は僕の正しいと思った事を基準に行動しているだけだから……。それと、僕からも一つ聞いてもいいかな？」

俺は無言でこくりと頷く。

「洸、君ならだ。もしも大切な誰かが自分の手の届かないところに行ってしまったらどうする。自分の手の届かない高みへ行ってしまうたら？」

その質問は、まるで俺を試すかのような口調で言われた。

だから俺も迷うことなく答える。だって、答えはあのとくにもう決めたから。

「胸を張って隣を歩けるようになるまでその背中を追いかけて続けるさ。どんな苦渋の道でもな」

その答えにシグは納得したのか、彼の隣に座っていた玉藻の頭を優しく撫でる。そして、変化の少ない表情を少し緩ませた。

「そう……か。そうだね。その答えを初めから持っているならきつと大丈夫だよ。蒼香ちゃん、行こうか」

「そうですね、行きましようか」

シグは玉藻　　蒼香と共に立ち上がると、学食の出口に向かって歩いていく。

「あ、ちょ、昼飯食わないのか？」

「気づいてないみたいだけど、昼食を食べてないのは君だけだよ」
「なっ!？」

俺は急いでナギと姉さんのほうを見る。

そこには綺麗になった容器だけが置かれていた。

「な……いつの間に……」

「どうしたの洗ちゃん？」

俺は姉さんの不思議そうな声を聞くと同時に、急いで食券を買いに行く。

姉さんは理解できないといった風に俺の座っていた席の隣に座ると、テーブルの上に肘をついて手の上に顎を乗せる。

俺はそんな姿を見ながら食券をおばさんに手渡し、その代わりに渡された天ぷらそばを眺めながら小さく呟いた。

「不思議なやつだよ……アイツ」

第貳記録（前書き）

『なあ、姉さんは何か叶えたい願いつてあるのか？』

『今は先生でしょ洸ちゃん。でも、いきなりどうしたの？』

白昼の夢、白昼夢。別名をデイドリームと呼ぶ。フラッシュバックとしばしば勘違いされる言葉であるが、実際に意味は異なる。

『いいから教えてよ』

白昼夢は目覚めている状態で見える現実味を帯びた非現実的な体験や、現実から離れて何かを考えている状態に対して、フラッシュバックは過去に体験した出来事を思い出している状態なのだ。つまり、似て非なる存在。

だから、俺が今見ている映像は過去の記憶の一部と分かっているために記憶のフラッシュバックと言えるのだろっ。

『そうね、私は

になりたいかな』

第貳記録

「おーい、起きろよ。起きないと顔にラクガキしちまうぞー」

頬つつかれる感触。眠い、まだ眠っていたい。何だよ、もう少しで忘れてしまった何かを思い出せそうなんだ。まだ授業開始のチャイムは鳴っていないんだから眠っていてもかまわないだろう。

両手で耳を塞いでささやかな抵抗をする。

「寝てるのか起きてるのか微妙な反応だな……ま、いっか」

声が遠ざかる。夢の続きを見ようと試みたが、どうやら完全に脳は覚醒に近づいてしまっているようなので断念し、ぼんやりとした意識のままに身体を起こす。

視界がおぼつかない。分かることと言えばやわらかいものが頭の下にあるということだけ。

えっと、俺は何をしていたんだっけ？ 呆けているうちに、思考が追いつく。

昼食を急いで食べて、いつものように昼寝をするために中庭の一角にあるベストプレイスに来た。

そこまで思い出したところで完全に目が覚める。だが、身体は跳ね起こせなかった。

「わわ、洸ちゃんったら大胆ね……別にお姉さんはかまわないけどね」

状況を把握するために声と記憶を一致させる。この声は間違いなく姉さんのもので、昼寝に入る前の俺はぽかぽか陽気に当てられてうとうとと眠ってしまった。

結論、どうやら俺は姉さんに膝枕をされているらしい。

「どうして姉さんが膝枕なんてしてるんだよ……？」

「洸ちゃんが寄りかかってきたから久しぶりに膝枕しちゃいたくなっただけ」

木々の間から木漏れ日が覚醒寸前の脳の覚醒を妨げる。

「俺が……姉さんに？」

「うん。それに、洸ちゃんの寝言も聞いてみたかったしね」

「俺……何か呟いてた？」

いまいち思い出しきることの出来なかった夢の内容を補完させるために、恥を忍んでまで姉さんに尋ねる。

「教えてとか、何とかって呟いてたけど……どんな夢見てたのかなー？」

だが、返ってきた言葉は期待していたものとは全く違うものだった。しかも、その表情は何を勘違いしているのかニヤニヤしている。

「いや、なんでもないよ……」

「うん、知ってる」

「はあ……姉さん、知ってるなら茶化さないでくれよ」

「それも分かってるわ。けどね、こうして膝枕をするのも本当に何年ぶりかしらね……………」

姉さんの膝の上から見える双丘、そして線の細い顔が木漏れ日の逆行によって眩しく照らされている。

「なあ、姉さん…………そろそろ解放してくれないかな？」

そして、両手で頭を固定されているために起き上がることもすら出来ない。

「あ、ゴメンゴメン。懐かしくってついね……………」

「…………別に、いいよ。姉さんの膝枕、嫌いじゃないし」

「ふふ、お姉ちゃんに気を使っなんて洸ちゃんも本当に大きくなっただんなあ」

思い出すように呟かれた姉さんの言葉とともに、俺の頭は姉さんの手から解放される。

俺は自分の手で木漏れ日を受け止めながら身体を起こす。

「姉さんが思ってるほどに俺は大人じゃないよ。まだまだ子供だ」

「えー、でもお…………洸ちゃんのナニは十分大人な反応をしているみたいよ」

シリアスをぶち壊すこと数秒。姉さんは俺の股間の辺りをまじまじと見つめながら再びニヤケ始める。

「…………怒るよ」

「怒っちゃだーめ。うん、お姉ちゃんも悪かったから機嫌直すの。分かった？」

姉さんの指先が俺の額に触れる。

その手はひんやりと冷たく気持ちよかった。

「……分かった」

「それじゃ、教室に戻る？」

姉さんはぐつと背伸びをすると、教室を指差して俺に微笑みかける。

「そう……するかな。そういえばさ、ナギは？」

「ナギ君なら洗ちゃんの顔にラクガキ使用としていたけどね、従者のエリーナちゃんに連れて行かれちゃったわよ」

「……従者って何なんだろっ」

姉さんに聞こえないような声でぼそりと呟く。

「え、何か言った洗ちゃん？」

そんな言葉を背に受けながら、俺は中庭から教室に戻っていった。

「今日の午後の授業は実習だったさ。今日もうじゃうじゃ来るんじゃないのか……決闘相手がさ」

そういつて、ナギの手が俺の肩に乗せられる。

「随分嬉しそうだな、ナギ……」

「だってよ、お前の決闘相手が女子生徒だったら貴重なパンチラが拝めるじゃんかよ」

ナギのぐつと立てられた親指を俺は無言で握ると、本来曲がってはいけない方向に少しずつ押していく。

「こ、洩。親指がいけない方向に曲がっていくんだけど……い、いででで……！」

「友人を売ってまで女子生徒のパンチラを拝みたいのかよ？」

「見たい！　だって、エリーナのパンチラ見てもお父さんの気分になるんだぜ？」

ナギの言葉にエリーナは派手なりアクションをとっていじけ始める。

その姿は雨の日にダンボールの中に捨てられた子猫を見つけたときの可愛さを彷彿させる。

「取り合えずだ……俺がお前に決闘を挑んでやろうか？」

「あー、無理無理。俺じゃどう考えてもお前に勝てねえもん」

ナギは大げさに手を振って意味の無さを伝えてくる。

「その心は？」

「従者、主ともに劣っているでしょう。そもそも、俺とお前の関係は当の昔に決まってるんだろ」

「……でもな、姉さんの力に頼って決闘に勝つ俺の姿って滑稽だぜ？　せめて相応の実力をつけてだな」

その瞬間だった。

「だったら、僕とだったら決闘してくれるって訳だね」

九代目玉藻を隣に、シグが俺の肩に手を乗せる。

「はあ、どうして突然お前が洸に決闘を挑むんだよ？」

「魔術師たるもの、互いに高みを目指せって言う校訓があるから……で、いいんじゃないかな」

「嫌だ、却下。俺は戦いたくないね」

「だったら、言い方を変えましょう。僕、シグ・フレイマーは、今神洸及びその従者天音に決闘を申し込む」

それは、この学園における学園長が考えた正式な決闘の申し込み方法だ。それも、同ランクの相手に対する最高の礼儀に当たる。

「それは本気なのか？」

「そうなるよ」

「従者も……って聞くまでも無いか。分かった、ルールはどうする？」

シグの淀みない視線に俺は了承の意を示す。

魔術師として魔術師に決闘を挑むのならば、従者の介入は極力控えるべきだと俺は思っている。魔術師の中でも召喚術師サモナーのような者は別として、魔術師同士の決闘はお互いに隠し続けた秘術を存分に発揮して死力を尽くし、戦い抜くことが礼儀だからだ。

「洸。君の言いたいことは分かっているつもりだよ。勿論、従者の介入は無し」

「了解。場所は校庭で……いや、第二演習場でいいか？」

第二演習場とは、この学園に存在する数ある闘技場の別名である。ここを含めて六部屋の演習場が存在しているのも別の話だ。

「良いのかい、あんな障害物の少ないステージで？」

「公平な条件でこそその決闘だからな」

俺がそこまで言った所で、姉さんが口を挟むように言葉を放つ。

「悪いけど……玉藻、蒼香ちゃんが手を出してきたら私も遠慮はしないわよ」

少し棘のある声で、姉さんはシグを威嚇するように睨み付ける。

「流石に『六大始祖』に蒼香ちゃんが敵うかどうか……」

それに対してシグは流れる雲の如くの対応で軽く受け流す。

けど、姉さんがこんなことを言うなんて珍しいな。

「『六大始祖』の番外位の一人を引き連れてよく言うわね……」

「安心してください。私は貴方が手を出さない限りは力沿いなどしませんから」

姉さんの視線を一身に受けていた九代目玉藻・蒼香は微笑みながら言葉を返す。

その瞬間、俺は疑問に思っていたことを姉さんに尋ねた。

「なあ姉さん、番外位ってどういう意味だよ？」

「言葉の通り、始祖の一角には数えられていないけど『六大始祖』に最も近い位の者のことよ」

「なっ！」

「気をつけなさいよ洸ちゃん。ワタシが言つのもおかしな話だけだね……」

俺が姉さんのこんな顔を見るのはいつ以来だろうか？

記憶を遡って探してみても、こんな顔をしているのは数えるほどにしかない。

その記憶のどれもが、俺の命に危険があつたときだけだ。

もしかして俺……結構ピンチ？

「じゃ、僕は学園長を呼んでくるから先に待っててくれるかな」
「あ、ああ」

こうして、あの決闘から初めての正式な決闘が決まった。

俺は思う。この戦いは決闘に勝つという意味に気がつく為に、シグが与えた試練ではなかったのかと……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2478z/>

僕と六大始祖の学園記録

2011年12月21日18時53分発行